様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２１７８９

研究課題名（和文）離島と都市部の保育園新入園児における保育場面への移行に関する縦断研究

研究課題名（英文）A longitudinal study of transition to nursery school by newly enrolled children in a remote island and an urban area

研究代表者
根ケ山　光一（Negayama, Koichi）

早稲田大学・人間科学学術院・名誉教授

研究者番号：００１１２００３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,800,000円

研究成果の概要（和文）：保育園への入園は子どもにとって生まれて初めて家庭から離れてアロマザーのもとに長時間身を置く体験である。本研究はその初発事態を離島（沖縄県宮古郡多良間村）と都市部（東京都及び埼玉県）で比較しようとするものであったが、コロナ禍のためやむなく都市部に集中して研究を行った。その結果、入園が子どもにとってストレスフルな体験であること、それを緩和するうえで保育士の身体接触特に抱きが重要な役割を果たすこと、さらにモノの存在も大きな意味を持っており、保育士が身体接触とともにモノへの接触を促し、それが子どもの移動行動や自発性の発達とあいまって環境移行を支えていることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、新規入園という場面に焦点化し、家庭からの環境移行における子どもの適応能力を明らかにすることができた。特に保育士の果たす役割ならびに子どもにとってポータブルな私的モノ環境、いいかえると「お守り」としての玩具の役割に光をあてることができ、家庭での親による保護から保育園での保育士によるアロマザリングへの環境移行におけるヒトとモノの複合システムが果たす役割について新たな観点を生み出すことができた。このことは発達心理学的に貴重な知見であるだけでなく、保育実践にも重要な示唆を与えるものである。

研究成果の概要（英文）：Entering a nursery school is the first experience for a child to be away from home and spend a long time under the aromatherapy. This research was to compare his initial situation on a remote island (Tarama Village, Miyako District, Okinawa Prefecture) and urban Kanto areas (Tokyo and Saitama Prefecture), but due to the corona pandemic we were forced to concentrate on the urban area. As a result of our studies in Kanto areas, it was found that entering kindergarten is a stressful experience for the newly enrolled children, and physical contact, especially hugging, by nursery nurses plays an important role in relieving it, and that the presence of objects (toys) also has great significance. The nurses encouraged contact with objects while in holding the children, which, together with the development of locomotor behavior and autonomy in children, promoted play and adaptation to the situation, which supports their environmental transition from home to a day nursery.

研究分野：発達行動学

キーワード：保育園入園　環境移行　乳児　位置移動　モノ　保育士　身体接触　抱き

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

現代日本では，子どもは家庭で親によって育てられるばかりではなく、親の就労等で保育園に預けられることも多い。保育園は保育士というアロマザーと育児具、それに子どもと同年代の乳幼児が存在する場であり、親の産休・育休期間が明けた時点から保育園に入園する子どもも多い。保育環境は人的環境(保育者や仲間)，物的環境(園庭や園舎，遊具，玩具など)，自然環境(園舎周辺の自然)，社会的環境(地域社会)から構成されるが，乳児期の特性をふまえると，人的環境・物的環境が重要である。乳児の人的環境は仲間より養育者(保育者)が中心となるが，前言語期における他者とのかかわりは身体を介するものが多く，特に養育者との身体接触は身体的・社会情緒的発達にとって重要な役割を果たす（Field，2010)。このことは家庭だけでなく保育園においても同様であり，保育者は子どもとの親密なコミュニケーションの手段として，あるいは子どもを統制するために身体接触を用いる(Bergnehr & Cakaite，2018)。人的環境と並んで，保育園入園時の乳児の適応を支えるものが物的環境である。乳児は家庭でも多くのモノに囲まれているが，保育園でも乳児は自由遊び場面の約半分の時間，モノ(玩具)をいじる・なめるといったかかわりを行なっている(Toyama，2020)。

近年，保育の質が子どもの発達に及ぼす影響に関する検討が国内外においてなされており，保育の質の向上が求められている。また行動観察によって評価されるその保育の質の指標として，ポジティブな身体接触が取り上げられており（例えばNICHD，2006），身体接触は保育の質と直結するトピックであると考えらえる。その評価は，乳児が保育施設において，どれくらい，いかなる身体接触を伴う関わりを経験しているのか，それは縦断的にいかに変化するのかという基礎的検討とその蓄積をベースとすることではじめて妥当なものになると考えられる。保育者と乳児における身体接触だけでなく、さらに乳児同士の身体接触的関わりも含めて詳細に検討することで，身体性を基盤とした乳児の他者との萌芽的な関係性の発達という新たな側面を明らかにすることができる可能性がある。従来の研究においては，子どもが他者と並行して，あるいは一緒に遊ぶようになるのは２，３歳以降とされており，これまで日本の子どもの身体接触を扱った研究は，幼児期の子どもを対象としたものが多い（例えば塚崎・無藤，2004；柴田，2007； 広瀬，2007； 藤田，2011）。しかしながら，０歳児でさえも，身体接触遊びのなかで予期などを含めた認知的に高度な関わりの萌芽がみられることもわかっている（石島・根ケ山，2013；Ishijima & Negayama,2017）。

このように保育園は家庭とは異なった物理社会的環境であり、子どもは日常的にその間を移行し、環境の変化への適応を体験している。特に新規に入園する場面は家庭というマザリングの場から保育園という他者のアロマザリング(Hrdy，2009)の場への生まれて初めての移行であり、子どもにとっては大きな試練の場面である。そのストレスを子どもは乗り越えるか、そこに保育士・育児具（モノ）・子どもはどのように関わるであろうか。保育者や仲間，そしてモノ(玩具)に対する乳児のかかわりが，保育園という新たな環境に馴れるにしたがい，どのように変化していくかは子どもの発達にとって重要な問いであると考えられる。沖縄の離島である多良間島は、守姉をはじめとしてアロマザリングの発達した島であり（根ヶ山、2012）、そこでの入園・保育と本土都市部での入園・保育とは移行の姿が大きく異なる可能性がある。

２．研究の目的

具体的には3つの目的を持つ。離島と都市部に比較という目的にしたがって具体的な比較研究が当初計画されたが、新型コロナウイルスの蔓延の時期と重なってしまって、沖縄への渡航が長期間にわたってできなくなり、また保育園での観察も大幅に制限されたため、研究全体の全面的見直しを行わざるを得ず、目的も許容される範囲での修正を余儀なくされた。

（1）新規入園時の環境移行場面における順応からの検討（根ヶ山）

ストレスのかかる新規入園場面で、子どもは母親からの分離にしばしば激しく泣いて抵抗する。登園場面は単なる子の母親からの分離場面ではなく，母親からアロマザーへの移行の瞬間でもある。とくにその初発事態としての「新入園」は，母子をそれまでとは異次元の分離状態に引き込む「子別れ」の場面として，子の自律の発達にとって決定的に大きな意味を持つ。本研究はその場面に焦点化して，子別れとしてのその移行プロセスを明らかにしようとするものである。アロマザーである保育士はその子どもを受け取ってなだめ、あやして保育園への移行がスムーズにできるようにケアする。そこには玩具や遊具が活用され、場合によって他の子どももそれに関与する。本研究ではその様子を多良間島と本土都市部とで比較すること、そしてそれを追跡することを目的とする。

（2）身体接触の発達からの検討（石島）

本研究では保育園に入所したばかりの０歳児クラスにおける身体接触的関わりに着目し，乳児―保育士間，乳児―乳児間においていかなる身体接触がなされ、それが発達的にどのように変化するのかについて検討する。特に、遊び場面において，乳児―保育士間，乳児―乳児間の身体接触の量および身体接触のタイプが１年間でいかに変化したかについて事例的に検討する。

（3）接触行動と移動行動の発達からの検討（外山）

本研究では，保育園に入園したばかりのゼロ歳児を対象として，入園からの時間的経過にともなう変化を明らかにする。近年，ハイハイからつたい歩き，歩行へという移動運動の発達がきっかけとなって，環境の探索方法や言語，他者とのかかわりが変化していくという知見が集積されつつあることから(Adolph & Hoch，2019)，移動運動の発達に視点をおきながら分析を行う。

保育園ゼロ歳児クラスの縦断観察を行い，(a)他者との身体接触，(b)モノを介した他者とのかかわりが，ハイ

ハイからつたい歩き，歩行へという移動運動の発達時期によってどのように変化していくかを明らかにする。その結果をふまえ，乳児期の場面移行を支援する環境のあり方を考察する。

３．研究の方法

本研究の実施期間に生じたコロナ禍のため、沖縄入島と保育園観察が大幅に制限された。期間を延長して状況の改善を待ったがそれも部分的にしか達成されなかった。したがって不本意ながら方法を修正しつつ現実的に可能な形で研究を行った。

（1）新規入園時の環境移行場面における順応からの検討

当初は沖縄県多良間村立多良間保育所および都市部（東京都下・埼玉県下）の保育所での新規入園児（0歳児）を比較観察するという予定であったが、上記の通りそれは成立せず、おもに埼玉県下の保育園での許された範囲での入園観察に集中し、多良間島の入園場面については過去に行った事例の撮影映像を参考程度に活用した。保育園児が母親に付き添われて初めて登園し，保育に入っていく過程をその初日から最初の４日間は連日，その後は１か月まで週２回、さらにその後は２週に1回程度の頻度で、連続２回泣かなくなるまでもしくは半年間，毎回登園時の母子分離直前から３０分間のビデオ撮影を行った。撮影は園児および周囲半径約１m程度を映像に収めるものとし，なるべく園児の視線や表情，対人・対物行動を記録するように努める。それとともに，分離直前、分離5分間経過時点、観察終了時点の３時点で観察対象児の顔面（とくに鼻部）の皮膚温度がサーモグラフィによって記録され、その場面における園児のストレスの指標とされた。

（2）身体接触の発達からの検討

観察開始時（4月時点）生後9ヶ月のA（男児）と生後11ヶ月のB（女児）の2名を対象として、4月時点では1週間に1回，その後は月に１・２回のペースで保育所０歳児クラスにおいて，2台のビデオカメラを用いて、1時間から1時間半程度）室内遊び場面の追跡観察を行った。その中の7回分（4月2回分，6月・8月・10月・1月・2月1回分）の映像を対象として分析を行った。 そして遊び場面の中で，AあるいはBが画面内に映っている場面をそれぞれ抽出し，乳児―乳児あるいは乳児―保育者において身体接触がなされている場面について，身体接触時間および身体接触のタイプについて分析を行った。分析には，動画解析ソフトウェアELAN を用いた。

（3）接触行動と移動行動の発達からの検討

都内保育園ゼロ歳児クラス(8名，4月時点の月齢は7～10ヶ月)の自由遊び場面を，週に約1度のペースで縦断的に観察した。保育室内に2～3台のカメラを設置し，毎回，1時間から1時間半程度の撮影を行った。他者との身体接触：各乳児について他者との身体接触が生起した場面を身体接触エピソードとして取り出した。次に，各身体接触エピソードについて，接触した相手(保育者か仲間か)，接触した身体部位，接触の機能(遊びや事物交換の際に接触する「道具的接触」，甘えたりなぐさめたり，あるいは怒りを伝えるために接触する「社会的接触」，移動している途中でアクシデント的に接触する「偶発的接触」)を評定した。モノを介した他者とのかかわり：各乳児について手がモノ(玩具)と接触している場面を事物エピソードとして取り出した。次に，各事物エピソードについて，乳児とモノ・他者とのかかわり方が二項関係・三項関係のどちらか(他者を介することなく子どもがモノとかかわっている場合は二項関係，他者にモノを見る・渡す，他者からモノをもらうなど他者が介在している場合は三項関係)，三項関係エピソードの場合，誰が相手か(保育者か仲間か)，そしてその相手から応答があったかどうかを評定した。各乳児の移動運動については，1．5m以上ハイハイできる・つたい歩きできる・歩行できるようになったことを指標として評定し，乳児ごとにハイハイ期・つたい歩き期・歩行期に分けた。

４．研究成果

（1）新規入園時の環境移行場面における順応からの検討

新規入園は、それまで基本的に家庭というなじみの場所で母親をはじめとする家族というなじみの相手と接触してきた子どもにとって、初めて見知らぬ物理・社会的環境に強制的かつ長時間にわたって置かれることである。それは子どもにとって新たな環境への進出であり世界を広げる体験であるとともに、自分を守ってくれてきた母親と離別することや多くの見知らぬ人物や事物に取り囲まれることでもあり、とてもストレスフルなことである。そのような危機的状況で子どもは「泣き」という悲嘆行動を発現させて助けを求める。特に新規入園場面では、いわゆる「ギャン泣き」といわれる激しい泣きを示して窮状を訴える。それは子どもにとってトラウマともいいうるべき体験であるとともに、保育士にとっても通常の保育に支障をきたしかねず、それをどう軽減させるかは大きな課題である。

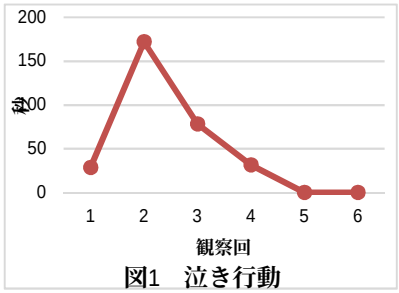

図1　泣き行動

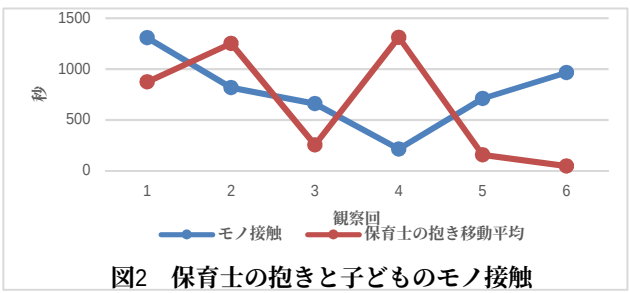

図2　保育士の抱きと子どものモノ接触

入園から約1か月間における入園児の泣き行動を分析したところ図1のような変化であり、入園児は確かに入園当初には泣きがみられるが初日はむしろ少なく、その後ピークを迎えたのち数回（ほぼ半月間）にわたって泣きの発現が続いた後消失するという興味深い変化を示していた。分離初日にはかえって泣きが少なかったが、そのかわりに子どもは周囲をキョロキョロと見回す行動が多く、状況をうかがっていることが見て取れた。根ヶ山らによる入園後の園児の分離場面での鼻部温度の分析からは、初期に園児の

鼻部温度の低下が認められ、泣きと温度低下には負の相関がみられていた（未発表）。彼らにとってこの場面がストレスフルな場面であり、高いストレスを示すものほど泣かないことが確認されたことは、子どもたちの反応としていきなり大泣きするのではなくまずは環境探索をし、状況確認を済ませてから大泣きをするという彼らの適応性が読み取れた。

図2はその1ヶ月間における保育士の抱きと子どものモノ接触の変化を表している。保育士の抱きは子どもの状態に依存するため変化はコンスタントとはいえないものの、減少傾向にあるといえよう。興味深いのは子どものモノとの接触で、初期に多く、一旦減少した後にまた増加している。初期の多発は保育士の提示によるものであり、後半の多発は子どもの自発性によるものであった。入園後の園への順応につれて、子どもとモノとのかかわりに変化がみられたのである。初期には保育士があやすために手渡しをし、後半には子ども自身が安心のために保持しつつ遊びへと転化していったものと考えられる。

初期には複数の保育士が車座になって安全な空間を囲ってつくり、前にモノを配置しつつ子どもを前向きに抱くという行動が頻発した。これによって子どもは抱かれつつ床に腰を下ろし、互いを視野に認めながらモノに関わることができる。このような行動が自然に子どもを抱きからモノへと橋渡ししている可能性が高い。

この場面は子どもにとって別離の悲しさと豊かな環境との出会いの喜びがミックスされた状態であり、モノがそこでの制御可能でポータブルな身辺環境、ある種の「お守り」となり、やがて遊びの対象として保育園への順化を支えているものと解釈された。

（2）　身体接触の発達からの検討

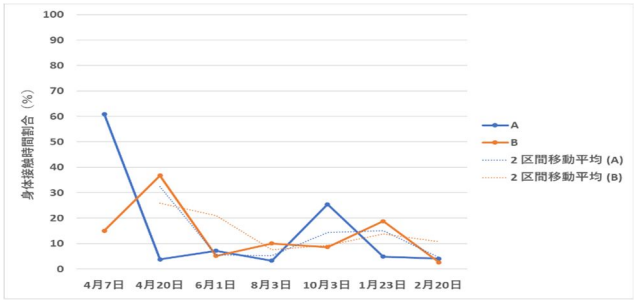

図3. 身体接触時間の割合の変化

①　身体接触時間の変化：入所したばかりの４月から、年度の中で身体接触時間がいかに変化していたかについて検討した。その結果、４月時点では身体接触が多くみられるものの、その後減少し、年度の後半においてやや増加して再び減少する、という傾向は概ね一致していた（図3）。

Aにおいては４月１回目と２回目時点における身体接触時間の減少が著しかった。なお、Aの4月1・２回目の観察における身体接触のタイプは、ほとんどが保育者による「抱っこ」であった（４月１回目：約91%、4月2回目：約87%、図4）。

Bは4月2回目の観察の時点で身体接触時間が増えており、そこにおいて最も多く生じた身体接触タイプは保育者の膝や、足の間などに「座る」行動であった（全身体接触タイプのうち約66%、図5）。Bは０歳児クラスにおいて最も高月齢であったことをふまえると、４月時点におけるAとBの身体接触時間および身体接触タイプの違いには、個人差や月齢差の影響がある可能性がある。いずれにしても、入園当初である４月は身体接触のタイプに拘わらず、保育者による身体接触的関わりが最も長時間なされる時期であると考えられる。

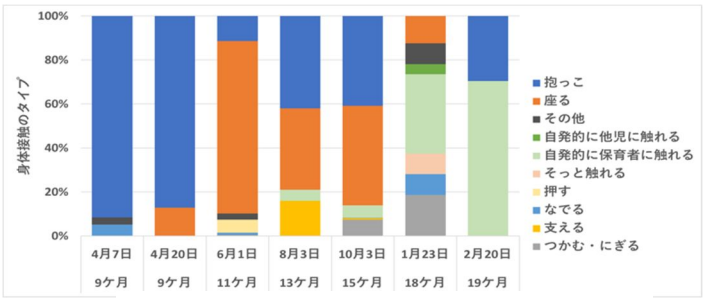

図4. Aにおける身体接触タイプの割合の変化

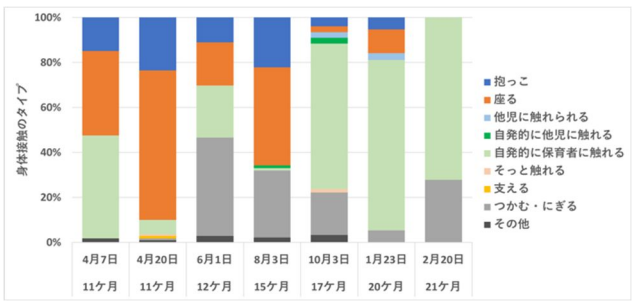

図5. Bにおける身体接触タイプの割合の変化

②　身体接触のタイプの変化：乳児―乳児あるいは乳児―保育者における身体接触がなされた場面の中で、身体接触のタイプがいかに変化していたのかについて検討した。その結果、Aは年度初めの４月頃は「抱っこ」が多く、6月から10月では保育者の膝や足の間などに「座る」行動が「抱っこ」と同程度あるいはそれ以上に見られるようになり、年度後半の１月・２月には「自発的に保育者に触れる」行動が多く生じていた。1月には、「自発的に他児に触れる」行動もわずかに見られた（図6）。受け身的かつ身体の大部分が保育者に触れる「抱っこ」が多くみられる状態から、身体接触のタイプに変化が生じ、「座る」「自発的に他児に触れる」といった、乳児による自発的・能動的な環境探索や他者とのコミュニケーションを行うことが可能になるような身体接触を伴う姿勢・行動へと変化していたと言える。

Bは4月時点より、「自発的に保育者に触れる」行動が発現しており、また「抱っこ」よりも保育者のひざなどに「座る」行動のほうが多かった。また、「自発的に保育者に触れる」行動は後半期（10月・1月・2月）において多くみられた（図5）。

「自発的に保育者に触れる」行動が年度後半期において多く発現することは、A・Bにおいて共通していた。このことから、年度後半頃には、乳児が身体接触行う主体となり、保育者に能動的に働きかける存在へと変化していたと考えられる。こうした変化は、乳児が自らの身体性をベースとしながら保育者と関係性を構築し、かつその

主体性・能動性を保育者に対して発揮するようになる過程であるとも捉えられる。

自発的に他児に触れる・触れられる行動は、時間的な量としては多くはないものの、Aは１月（生後18ヶ月時点）、Bは８月（15ヶ月），10月（17ヶ月），１月（20ヶ月）時点に生じていた。具体的には、遊び場面において、Aが他児にポンと触れて微笑む、Bがぐずっている際に他児が近づいてきて、他児がAの背中にポンポンと軽く触れた後，他児がAの背中に頭をそっとのせる、といった行動が見られた。これらの他児との間の身体接触行動は、身体性を基盤とした乳児同士の関係性発達の萌芽プロセスの一端を示すと考えられ、注目に値し、今後さらなる検討が求められる。

（3）接触行動と移動行動の発達からの検討

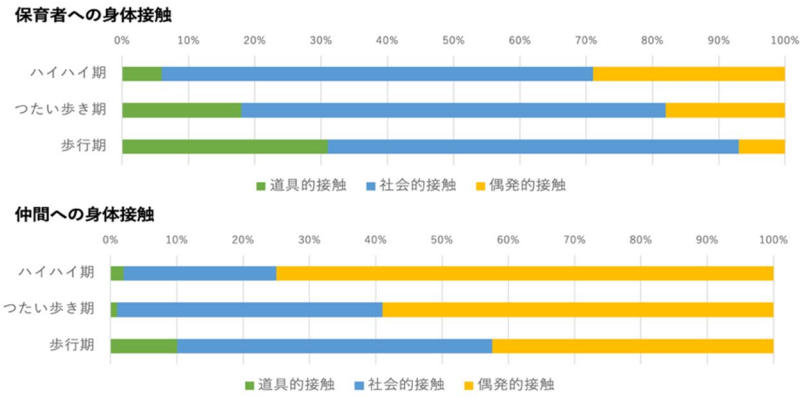

図6　各移動運動期における各身体接触の比率

①　　他者との身体接触：保育者から乳児への身体接触頻度は，移動運動時期にかかわらず一定であったが(30分あたり約8～13回)，乳児から保育者への身体接触頻度は，ハイハイ期(約2回)よりつたい歩き期(約3回)，歩行期(約5回)と徐々に増える傾向が認められた。一方，乳児から仲間への身体接触頻度は数が少なく，移動運動の時期による差は認められなかった(どの時期も約5回)。

図6に子どもから保育者への身体接触，子どもから仲間への身体接触について別々に，各移動運動時期における道具的接触・社会的接触・偶発的接触の比率を示した。保育者への身体接触については，どの移動運動時期でも社会的接触が多かった。また，移動運動の発達と共に偶発的接触が減り，道具的接触が増える傾向が認められた。一方，仲間への身体接触については，移動運動の発達と共に社会的接触が増えたとはいえ，どの時期でも偶発的接触が多かった。身体接触の頻度からみても，また身体接触の機能面からみても，乳児期における他者との身体接触では保育者の役割が大きいことがわかる。乳児から保育者への身体接触については，歩行期に入ると偶発的接触が10%にとどかない程度に少なくなり，かわりに遊びやモノの交換を機に身体を接触させる道具的接触および感情を伝える社会的接触が多くなった。これは上肢が移動運動の手段から解放されること，また手の巧緻性が高まることが背景にあると考えられる。

②　　モノを介した他者とのかかわり：本分析においても，どの乳児も自由遊び時間の約半分の時間，モノ(玩具)を持ったり振ったりいじったりしていた。1年間の観察期間中，保育者は子どもの興味・関心や発達状況に応じてモノ(玩)具）を入れ替えていた。たとえば，約半数の乳児が歩行できるようになる頃には小さいテーブルと椅子を配置し，その後はままごとコーナーを設置していた。

表1：各移動運動期におけるエピソード数・エピソード率

	ハイハイ期	つたい歩き期	歩行期
事物エピソード数(60分あたり)	33.9 (12.9)	40.4 (14.4)	40.9 (13.1)
三項関係エピソード数(60分あたり)	13.0 (7.2)	22.5 (9.9)	31.2 (11.0)
三項関係エピソード率	11% (11%)	41% (19%)	49% (28%)
双方向的エピソード率	17% (13%)	38% (16%)	58% (18%)

表1に示した通り，事物エピソードの頻度は，ハイハイ期よりつたい歩き期と歩行期の方が多かった。移動運動の発達による頻度の上昇は，三項関係エピソードにおいて顕著であった。乳児は歩き始めると，モノをひとりで探索するのではなく，他者に見せたり，渡したり，他者の注意を自分が持っているモノに向けさせたりといったかかわりをより頻繁に行うようになることが示された。三項関係エピソードにおいて乳児がモノを共有する相手はどの時期においても，ほとんど保育者であった(83～91%)。保育園は子どもの数に比べて保育者の数が多いため，乳児がモノの共有を保育者に求めたとしても，保育者が気づかず，応答しないことも多い。表1に示したように，乳児の働きかけに対して保育者が応答したエピソード(双方向的エピソード)の比率は，ハイハイ期では17%だったが，つたい歩き期，歩行期になるにつれ徐々に増えた。保育者が応答するエピソードでは，エピソードの直前に乳児が保育者に近づくことが多く，このことが双方向的なエピソードの成立に寄与することが示唆された。

他者との身体接触についても，モノを介した他者とのかかわりにおいても，乳児期において乳児がかかわる相手は保育者が多いこと，しかし歩行が可能になると乳児から保育者に身体的接触を求めたり，モノを保育者のもとに運び，注意の共有を求めるなど，乳児側からの積極的なかかわりが増えることが示された。乳児期における家庭から保育園への場面移行においては，保育者の適切なかかわりと，保育者と乳児をつなぐモノ(玩具)の配置がカギとなることが示唆された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計27件（うち査読付論文　21件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 根ヶ山光一・河原紀子	４．巻 17
２．論文標題 保育園児の降園場面における行動：沖縄離島と関東都市部の比較	５．発行年 2022年
３．雑誌名 こども環境学研究	６．最初と最後の頁 78－84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Koichi Negayama, Jonathan T Delafield-Butt, Keiko Momose, Konomi Ishijima, Noriko Kawahara	４．巻 12
２．論文標題 Comparison of Japanese and Scottish Mother-Infant Intersubjectivity: Resonance of Timing, Anticipation, and Empathy During Feeding.	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Frontiers in psychology	６．最初と最後の頁 724871-724871
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2021.72487	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 根ヶ山光一	４．巻 30
２．論文標題 新型コロナウイルスパンデミック下の親子関係と医学的支援	５．発行年 2022年
３．雑誌名 乳幼児医学・心理学研究	６．最初と最後の頁 67－76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 外山紀子・大石紗希	４．巻 22
２．論文標題 カレーライスの盛り付けに応じた食器・食具操作の発達	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人間生活工学	６．最初と最後の頁 46－52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 西尾千尋・石井千夏・外山紀子	4．巻 28
2．論文標題 歩行開始期において乳児が物と関わる行動の発達	5．発行年 2021年
3．雑誌名 認知科学	6．最初と最後の頁 578-592
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 外山紀子	4．巻 29
2．論文標題 病気と死に関する理解	5．発行年 2021年
3．雑誌名 乳幼児医学・心理学研究	6．最初と最後の頁 3－8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 韓雪・長谷川智子・外山紀子	4．巻 93
2．論文標題 園の食事における新型コロナウイルス感染症対応からいる日本と中国の文化差	5．発行年 2022年
3．雑誌名 心理学研究	6．最初と最後の頁 9030-9030
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.93.20080	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Noriko Toyama	4．巻 31
2．論文標題 Developmental changes in infants’ physical contact with others across the transitional period from crawling to walking	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Infant and Child Development	6．最初と最後の頁 e2288
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 外山紀子	4．巻 30
2．論文標題 幼稚園・保育園における当番活動の実施状況と幼児期の発達に関する保育者の信念との関連性	5．発行年 2022年
3．雑誌名 乳幼児・医学心理学研究	6．最初と最後の頁 115-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Noriko Toyama	4．巻 未定
2．論文標題 Japanese preschoolers’ cooperative engagement in lunch monitoring activities	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Cogent Education	6．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/2331186X.2022.2070052	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Noriko Toyama	4．巻 18
2．論文標題 Developmental changes in infants’ object interactions across the transitional period from crawling to walking	5．発行年 2021年
3．雑誌名 European Journal of Developmental Psychology	6．最初と最後の頁 520-544
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/17405629.2020.1814730	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 根ケ山光一	4．巻 16
2．論文標題 離島と都市部における小学生の事故と教師による対応:災害報告書の分析から	5．発行年 2020年
3．雑誌名 こども環境学研究	6．最初と最後の頁 118-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 根ケ山光一	4．巻 16
2．論文標題 家庭環境における母子の身体接触遊び行動	5．発行年 2020年
3．雑誌名 こども環境学研究	6．最初と最後の頁 47-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 根ケ山光一、石島このみ、百瀬桂子、河原紀子	4．巻 79
2．論文標題 発達初期の抱きと抱きにくさに関する縦断研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 小児保健研究	6．最初と最後の頁 314-321
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 外山紀子	4．巻 9
2．論文標題 食の社会性	5．発行年 2021年
3．雑誌名 子ども学	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Toyama, Noriko	4．巻 -
2．論文標題 Developmental changes in infants’ object interactions across the transitional period from crawling to walking.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 European Journal of Developmental Psychology	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/17405629.2020.1814730	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 根ケ山光一	4．巻 159
2．論文標題 アロマザリングと環境	5．発行年 2019年
3．雑誌名 発達	6．最初と最後の頁 45-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Toyama, N.	4．巻 51
2．論文標題 Development of integrated explanations for illness.	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Cognitive Development	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.cogdev.2019.05.003	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 外山紀子・荻原典亜	4．巻 30
2．論文標題 カレーライスの摂食場面におけるスプーン操作の発達	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本食生活学会誌	6．最初と最後の頁 87-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2740/jisdh.30.2_87	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鹿田みくに・外山紀子・青木洋子	4．巻 28
2．論文標題 手づかみ食べに関する母親の環境調整的働きかけ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 乳幼児医学・心理学研究	6．最初と最後の頁 133-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 根ヶ山光一	４．巻 33
２．論文標題 逆境体験からみた縦断研究	５．発行年 2022年
３．雑誌名 発達心理学研究	６．最初と最後の頁 221－233
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Koichi Negayama & Colwyn Trevarthen	４．巻 68
２．論文標題 A comparative study of mother-infant co-regulation of distance at home in Japan and Scotland	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Infant Behavior and Development	６．最初と最後の頁 101741
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.infbeh.2022.1017	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 外山紀子	４．巻 31
２．論文標題 母子の離乳食場面におけるリズミカルな表現	５．発行年 2022年
３．雑誌名 乳幼児医学・心理学研究	６．最初と最後の頁 47－63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 外山紀子	４．巻 64
２．論文標題 「食」の原点から考える孤食・共食	５．発行年 2022年
３．雑誌名 保健の科学	６．最初と最後の頁 734－737
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Noriko Toyama	4．巻 65
2．論文標題 Development of explanations for why biomedical and folk-medical practices would be effective	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Cognitive Development	6．最初と最後の頁 101272
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.cogdev.2022.101272	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 外山紀子	4．巻 22
2．論文標題 発達のビリヤード	5．発行年 2023年
3．雑誌名 ベビーサイエンス	6．最初と最後の頁 15－16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Noriko Toyama	4．巻 28
2．論文標題 Locomotion development and infants’ object interaction in a day-care environment.	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Infancy	6．最初と最後の頁 684－704
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/infa.12523	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 根ヶ山光一
2．発表標題 日英の家庭における母子間距離の相互調節
3．学会等名 日本乳幼児医学・心理学会
4．発表年 2022年

１．発表者名
根ヶ山光一

２．発表標題
日英の離乳食供給場面における母子の音楽性： 両者の開口行動の同期から

３．学会等名
日本発達心理学会

４．発表年
2022年

１．発表者名
外山紀子

２．発表標題
母子の離乳食場面におけるリズミカルな表現

３．学会等名
日本発達心理学会

４．発表年
2022年

１．発表者名
石島このみ

２．発表標題
遊びが「うまくいく」とは何か：乳児期の身体接触遊びにおける母子相互作用の分析

３．学会等名
日本乳幼児医学・心理学会

４．発表年
2022年

１．発表者名
根ケ山光一

２．発表標題
新型コロナウイルス流行下における親の子育て

３．学会等名
日本乳幼児医学・心理学会第30回大会

４．発表年
2021年

１．発表者名
石島このみ

２．発表標題
乳児とのマルチモーダルなくすぐり遊びにおいて母親は何を感じるか

３．学会等名
日本乳幼児医学・心理学会第30回大会

４．発表年
2021年

１．発表者名
根ケ山光一

２．発表標題
沖縄離島と関東都市部における小学生の事故：災害報告書の分析をもとに

３．学会等名
日本発達心理学会第31回大会

４．発表年
2020年

１．発表者名
根ヶ山光一

２．発表標題
保育園児の事故傾向：小学生との比較から

３．学会等名
日本乳幼児医学・心理学会第32回大会

４．発表年
2023年

１．発表者名
石島このみ

２．発表標題
乳児は身体接触を介して他者とどのように関わるか？：保育所０歳児クラスにおける縦断的研究

３．学会等名
日本赤ちゃん学会若手部会第７回研究合宿

４．発表年
2019年

〔図書〕　計4件

1．著者名 Koichi Negayama	4．発行年 2022年
2．出版社 Waseda University Press	5．総ページ数 265
3．書名 Parent-Infant Centrifugalism and Centripetalism Overcoming the Prison of 'Parenting'	

1．著者名 石島このみ	4．発行年 2021年
2．出版社 株式会社みらい	5．総ページ数 216
3．書名 ワークで学ぶ 乳児保育Ⅰ・Ⅱ（分担執筆：第７章　乳児保育における遊び）	

1．著者名 根ヶ山 光一	4．発行年 2021年
2．出版社 新曜社	5．総ページ数 288
3．書名 「子育て」のとらわれを超える	

1．著者名 外山紀子	4．発行年 2020年
2．出版社 ちとせプレス	5．総ページ数 208
3．書名 生命を理解する心の発達	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	外山　紀子 (Toyama Noriko) (80328038)	早稲田大学・人間科学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	石島　このみ (Ishijima Konomi) (70735117)	白梅学園大学・子ども学部・講師 (32808)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関